HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	現代青年のマナー観について ： 礼儀作法の形成過程
著者	佐々木，眞由美; Sasaki，Mayumi
引用	北海学園大学大学院経営学研究科　研究論集(10): 25-37
発行日	2012-03

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

現代青年のマナー観について

── 礼儀作法の形成過程 ──

佐々木　眞由美

目　　次

Ⅰ．問題の背景
　Ⅰ－１．問題意識
　Ⅰ－２．マナーの定義
Ⅱ．マナーをめぐる三層構造論 ── 社会・歴史的背景
　Ⅱ－１．一層（古層）
　Ⅱ－２．二層（伝統的礼儀作法）
　Ⅱ－３．三層（明治以降の近代的マナー）
　Ⅱ－４．戦後社会におけるマナー
　　⑴　核家族化とマナー
　　⑵　日本的経営とマナー
Ⅲ．個人におけるマナーの形成層 ── 発達論的視座
　　１．ヘッケルの反復説
　　２．ホールの発達理論
　　３．エリクソンの生涯発達論
　Ⅲ－１．「個人の基本的成長過程」
　Ⅲ－２．「歴史 ── 民族的形成過程」
　Ⅲ－３．「近代的マナーの形成過程」
　Ⅲ－４．「企業人としての形成過程」
Ⅳ．現代の大学生がもつマナーの意識調査
　Ⅳ－１．調査の目的
　Ⅳ－２．調査方法
　Ⅳ－３．分析方法
　Ⅳ－４．結果と考察
Ⅴ．今後の課題

Ⅰ．問題の背景

Ⅰ－１．問題意識

近年、現代人のマナーが悪いといわれることが多くなってきた[1]。それは、幅広い年齢層において社会現象化しているとも言われるが、一般的に若い世代に対する指摘が多い傾向がある。しかし、はたして本当に若い世代にマナーの悪い人、マナーの欠落している人が多いといえるのだろうか。そうした事が問題と論じられるようになったのは何故かという問いに答えるには、マナーとは何かという概念と、それはどのように形成されてきたのかを検証する必要がある。マナーは不変ではなく時代とともに変わるものといえることからすると、マナーは時代の影響をどのように受けてきているのだろうか。まず、われわれがマナーと呼びならわしてきたのはどのような現象であるのか、その背景となる歴史・文化・社会的要因について概観してみよう。

Ⅰ－２．マナーの定義

マナーを定義づけるにあたり、エチケット、礼儀、作法という、似たような用語との異同を調べることから出発する。

ポスト（Post, P）は、〝Emily Post ETIQUETTE (17Ed.)〟のなかで、マナーは時代と共に変化し今日においてはさらに変化をとげているとし、エチケット（etiquette）とマナー（manner）の関係を次のように述べている。エチケットは、さまざまな場面で立場を越え、他人を思いやりその思いやりに基づいて、すべての人々が精神的に尊重し合う行動の規範である。それに対してマナーとは、この規範によって行われる実際の行為である。

柴崎（2008）によれば、日本の礼法における「礼儀」と「作法」についてみても、エチケットとマナーと同様の関係がみられ、西洋と日本の間の共通性が高く、基本的に違いがないという。例えば、人と会った時、挨拶しようと働きかける心が「礼儀」であり、実際に行う挨拶行為が「作法」であるとし、「礼儀」は、時と場所、状況に応じて行動を統制することであり、「作法」は、そうしたコントロールによってその場に適した表現の仕方であるとする。これは、ポストのエチケットとマナーの関係に関する議論と同型のものであると考えられる。マナーや作法は、相手や時代によって変化していくものであるが、エチケットや礼儀として受け継がれる思いやりの心や態度は短期間に変化するものではない。

また、エチケット（etiquette）の語源は、中世フランス宮廷からきている「従うべき決まりごと」であるのに対して、マナー（manner）は、ラテン語の manus から

[1] 森真一（2005）『日本はなぜ諍いの多い国になったのか「マナー神経症」の時代』

「手法」を意味する言葉である。平安時代の日本でも、礼儀は宮廷社会における形式的なルールを起源とし、行儀作法はそれを実際の行為として慣習化したものであった。しかし、西洋の場合も日本の場合も、そうした暗黙のルールが他者を大切にしようとする態度や気持ちが備わった行為に転化したのが「エチケットとマナー」であり、また、「礼儀と作法」である。ポストと柴崎（2008）から、マナーに関する考え方において西洋と日本の間には高い共通性があり、基本的に違いがないことがわかる。

では何故、エチケットやマナーのように、罰則もなく、明文化されていないにもかかわらず守らなければならない暗黙のルールが必要なのだろうか。ゴッフマン(1986)は、われわれの社会の中における行為のルールには、違反を規制する実体的なルールと表現に関わる儀式的ルールがあると述べている。実体的ルールには、法律や道徳、倫理が含まれていると考えられ、儀式的ルールには、マナーやエチケットがあてはまると考えられる。実体的ルールは、罰則を伴う法律に代表されるように、例えば人が他人の所有物を盗むことによって損害を与えることを防ぐことを目的としたものであるのに対して、儀礼的ルールは、人が他者に対して無礼な言葉や態度で相手を著しく傷つけるなど、コミュニケーションを阻害する行動を規制するルールである。つまり日常生活における人間同士の相互交渉の大部分を構成する行為の規範として、ゴッフマンは、実体的ルールとは異なる儀礼的ルールの存在を指摘しているのである。それは、お辞儀を例にとってもわかるように相手に対する敬意の表現であり、人間関係を円滑にし、社会的秩序を守るうえで重要な意味をもつものである。また、公式の場におけるお辞儀はそのふるまい方によって、その人の評価につながる重要な要素であるといえる。

II．マナーをめぐる三層構造論 ── 社会・歴史的背景

日本文化におけるマナーの形成について熊倉（1999）は、歴史的に三つの層から成るモデルを提案している(図１)。第一の層は、もっとも基本的な層で、人類に共通のレベルにかかわる層でもあり、おそらく進化論的なメカニズムや宗教的な背景があると考えられる。第二の層は、武士社会の行動様式を規範として江戸時代に完成された日本の伝統的な礼儀作法にまつわる層である。そして第三の層は、明治以降、近代化により導入された西欧流の行動規範に大きく影響された礼儀作法の層であり、異文化の衝突により形成された新たな文化的背景をもつものと考えられる。

本論では、熊倉（1999）の案を参考にして、現代における個人内のマナー形成を四層からなるモデルを土台として考えてみる。まず初めに形成される層は、個人と個人の人間的なつながりに関する基本的なマナーで、家族や家庭において成長と共に形成されるもの（笑顔、挨拶等）である。二番目に形成される層は、伝統に根差した民族的な習慣、慣習、慣例（お辞儀等）である。三番目に形成される層は、明治以降西欧から流入したマナーに影響を受けながら形成されてきた近代的マナー、そして四番目に形成されるのが近代日本社会のシステムにかかわる仕事上の作法に関するものである(図２)。この四つの層が個人と共同体のつながりにおいて複合的に作用し、現代社会におけるマナーの基本的枠組みが構成されていると考えられる。

熊倉（1999）の提案するマナーの三層は、人類の進化から始まり歴史的時間的に積み重ねられてきた層と、西欧文化の流入により日本の伝統文化と近代化の狭間において、大きな変化を被ってきたプロセスを表現したものである。そうした伝統的マナーと近代的マナーが歴史的時間の経過においてダイナミックに形成されてきたのが実態であるが、ここでは、説明の便宜上、各層を固定したものとして考察する。

II－１．一層（古層）

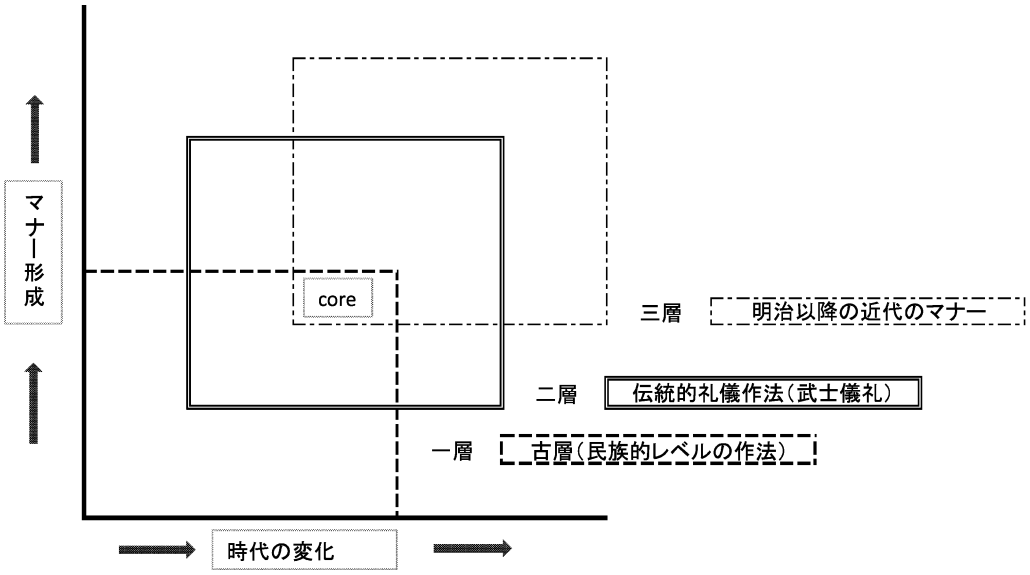
第一層は、古層といわれる部分で、人類共通の進化論的レベルの作法をあらわす。人類の進化や発達を考察するには、ダーウィンの進化論をその基本的原理と自然淘汰という観点をとる必要がある。ダーウィンによると、生き残って生殖にまで至ることができた生物は、身の回りの環境にうまく適応しており、それぞれの種はその生存している世界に対処し、それぞれの適応メカニズムを発達させている[2]と考えられる。熊倉(1999)も、本能としての人類の行動を忘れてはならないとしている。

人類の挨拶行動や攻撃行動は、その一部が獣の行動と共通する面をもっている。ローレンツ（Lorenz, k.）は、縄張りを作る動物の多くが、自分の縄張りにつがいとなる相手を導入する際に求愛行動の挨拶として攻撃行動をとることを示した。これは、つがいとなる相手と自分が協同して縄張りに侵入する敵を追い払うという象徴的行動だと解される。例えば、ガンの雌雄がつがいとなる際には、互いに羽を広げ、首を高く伸ばして敵を威嚇する時の警告音を発することが婚姻の合図となる。ヒトの挨拶行動の一つである笑顔も同様に歯を剥くという動物と共通の攻撃行動に源があるという。そのために、他者が自分に向かって見せる「笑い」が時として、「笑われる」という脅威の意味にもなる。

ヒトの新生児は、生まれた直後からムシ笑いをするよ

[2] D. F. ビョークランド・A. D. ベレグレーニ　無藤隆志（監訳）(2008)『進化発達心理学ヒトの本性の起源』P 6

図１　マナーの形成層（熊倉功夫（1999）より）



注）熊倉（1999）より筆者が図式化、作成

うに遺伝的にプログラムされている。それが、母親の乳児に対する親愛の情を高め、細やかな働きかけを引き起こすシグナルとなり、乳児の生存率を高くする。この働きかけ（声をかける、目と目を合わせる）は、また、ヒトにとって不可欠な言語の獲得にも重要な役割をもつことが知られている。

このように、第一層である古層の基本的なマナーである笑顔は、獣との類似行動をもとにして始まったものであるが、その後徐々に社会的場面で意図的に用いられるようになっていくと考えられる。

II－２．二層（伝統的礼儀作法）

第二層は、日本の伝統的な儀礼に基づく礼儀作法にまつわる部分である。平安時代貴族達（公家）は、身分を明示して権力を誇示するために儀礼や作法を定め、さらにそれらから発展した生活文化一般についての儀礼的ルールの体系をつくった。その中には、歩き方やお辞儀の仕方、贈答にともなう手紙の書式なども定められていた。公家はこれらを体系化し伝承する職業として有職をおいた。有職は当初、宮廷の儀礼や典礼に精通した知識をもった者を指していたが、儀礼や典礼そのものを指すようになった。また、官位にとっては有職に通じているということが出世の条件となった。二木（2003）は、平安時代を家格が生じ、家柄や格式による官位や官職も固定され、家格の制が近世まで受け継がれ、公家社会の思考様式や行動規範を大きく規定したと述べている。

しかし、鎌倉時代に入ると、武家が政治の担い手となり公家とは違う新しい儀式や礼法を作るようになった。武家の礼法は、細かい形式的な作法よりも武術に根差す身の安全の確保を基本としたもので、合理的な動きを身につけることに重きを置き、簡素で美しく無駄のない動きが尊ばれた。こうした動きが後に、茶道における洗練された所作の体系化へつながったといわれている。

江戸時代に入ると、家庭の躾は武家の教育を基におこなわれるようになった。当時、身分や階層によって習慣が異なっていたことは周知のことであるが、いわゆる町人の間でも武士階級の礼儀作法（マナー）がひとつの基準とされたのである（池上 2005）。男子に対しては、文武の修業の他、日常の礼儀作法・言葉づかい・物事の取りさばき方（山川 1983）など、また、女子は実生活に必要な読み、書き、裁縫の技術習得や武家邸、商家への行儀見習いなどがあった（小川他 2008）。五代将軍徳川綱吉が対外関係から撤退した後は、長期にわたる安定した内向きの社会が現出し、身分や文化の異なる人々同士のやりとりも、現代の我々が想像する以上に頻繁に行われていたようである（池上 2005）。

それまでの時代とは違って、政治的強制ではなく市民の仲間活動により人々の礼節にかなったふるまいが民衆化していったのである。芸事、趣味、道楽を仲立ちとする優雅なスタイルをもった、身分が違う人と人とのネットワークの場において発達した交際文化が、見知らぬ者同士がふれあう際のマナーの確立に寄与し、身分の異なる人々や異なる文化圏から来た人々との相互交渉を洗練し、江戸時代のマナー発達の原動力となったと考えられる[3]。

II－３．三層（明治以降の近代マナー）

第三層は、近代化によって導入された西欧流の儀礼に

[3] 池上英子（2005）『美と礼節の絆』P 408～414

よって、大きく影響された礼儀作法の層であり、異文化間の衝突によって形成された新たな文化的背景があると考えられる。

明治に入ると身分制度がなくなり国民という統一された概念が生まれた。それまで、階層ごとの別々な礼法をもっていたものが階層の違いを超えた新しい国民の礼法を作らなければならなかった。その時基準になったのが、武士階層の習慣やマナーである。武士の価値観や慣習法は、政府によって国民に広められていった。それまで庶民にとって当たり前の習慣が国家によって否定され、法をもって禁じられるものもでてきた。一例をあげると、1872 年(明治 5 年)制定された、「夏の暑い時でも上半身であっても裸で、人の目にふれてはならない」という東京都の条例である。それまで上半身裸で、床几に腰かけ団扇であおいで涼む姿は夏のありふれた風景であった。しかし首都、東京だからこそ外国人から見られることを意識しての条例、取り締まりであったのだろう（熊倉 1999)。このような条例の施行に伴い、西洋のマナーへの関心が高まり、宮中をはじめ政府高官たちの生活に取り入れられてきた。こうしたことも影響し、専用の茶器のない中で、紅茶の飲み方を書いた礼法書も発刊されたりした。また握手の仕方、洋間の扉の開閉マナー、洋風の食事の作法、宴会におけるマナー、椅子の座り方、他家訪問のマナーなど、新しい習俗を取り入れる試みが活発に行われた。

1872 年（明治 5 年）の学制発布以来、修身にあわせて礼法教育がすすめられていった。1880 年（明治 13 年)、小笠原流第 28 世宗家小笠原清務が礼法指導を建議したことが大きな反響をよび、当時の東京府知事が小笠原家の礼法を府下 73 校の小学校教師（1 校あたり 3 名ずつ）に学ばせ、教科書が作成された(熊倉 1999)。こうして神田の小川小学校を皮切りに各小学校で礼法の教育が始まった。さらに、教育勅語が制定され天皇を頂点とする身分制度の確立を目指したことから、修身を基本とした礼法が重視された。

伝統的な礼法と西洋のマナーの衝突は、その当時発刊された礼法書に細かくも複雑な西洋のマナーが記述され、当時の誰もがその紛紜さに困惑したのではないかと推察する。一例をあげると、それまでの生活の中で行われてきた座礼から、椅子によって生まれた西洋的な立礼の仕方や、ひざまずいて行う襖、障子の開閉から立ったまま行うドアの開閉について、また椅子の座り方や食事のマナー等がある。特に食事のマナーについては、欧米とまったく異なるマナーであることから、日本人は一番悩んだとされ、礼法書においては相当数のページをさいて説明されている。このように細部にこだわったさまざまな礼法書が発刊された。特に女性は、お客様を迎える大切な役目があったため、自分の家の作法として身につけていなければならなかった。当時刊行された書には、西洋のマナーの全般が書かれている他に客を迎え入れるマナーについても記されている。また、名刺の渡し方などは、厳格なマナーとして 1902 年（明治 35 年）刊行の『曲礼一斑』に、詳しく記されていた[4]。

大正になると、それまで必然性の乏しかった他家を訪問する作法（訪問時間、訪問時の名刺の渡し方、座敷での挨拶、辞去の挨拶等）が、比重を占めるようになり、公の場におけるマナー（公共物を大切にすること、握手の仕方等）も強調されてきた。それは、それまで問題とされなかった職場や学校などでの不特定多数の人々のなかでのふるまいかたである。

その後 1935 年（昭和 10 年）には、文部省の推奨により作法教育が一層強化され、西洋のマナー導入における混乱のなか、1938 年（昭和 13 年）「国民礼法」が構想された。しかし、礼法要項の公布された年、日本は太平洋戦争に突入し、その構想は戦争の終焉とともに崩壊した。その一方で、礼法書は国民礼法の形成のうえに明治初年から、人々の日常のさまざまな作法について記されたものが出版された。なかでも、礼法教授要項調査会委員長徳永義親が 1939 年（昭和 14 年）に出版した著書『日常礼法の心得』について、熊倉（1999）は、その出版数から（初版の 1 年後に 51 版を出版）戦時下の日本人のマナーに対する関心事は異常なほど強いものであると述べている[5]。

II－4．戦後社会におけるマナー

以上の三層をふまえたうえで、そののちに形成されてきたマナー層があることを確認しておきたい。第二次世界大戦の敗戦をきっかけに日本はアメリカ文化の影響を大きく受けることになる。上記三層の歴史的背景をもとに、新たな社会経済的な現象が生じたと考えられる。1960 年代から 1980 年代の日本の経済成長にともない産業構造が変化し、人々の生活様式も大きく変わった。家族形態もそれまでの多世代同居スタイルから核家族へと変化した[6]。このような核家族への移行は、家族成員や子供の成長に大きな影響を与え、結果的にそれまでのマナーに大きな変化をもたらしたと推察される。

(1)　核家族化とマナー

核家族化は都市化の必然的な結果ではあるが、それによって労働力の集約と同時に消費単位の増大という現象をともなって日本の内需拡大による景気に大きな影響を

[4] 熊倉功夫（1999）『文化としてのマナー』P 162～186
[5] 前掲書　P 208～224
[6] 坂脇昭吉・阿部誠（編著）(2007)『現代日本の社会政策』P 274～284

及ぼした。つまり、消費単位として個人の位置づけが大きな意味をもつようになるとともにマナーに関する態度も変化していったと考えられる。例えば、1950 年代、町中に公衆浴場（いわゆる銭湯）が数多くみられたが、その後、1960 年代になると徐々に各家庭に内風呂が備えられるようになった。このことは、見知らぬ人と一緒に入浴する際に必要とされるマナーについて学習する機会を失うことになったであろう。

また、個人のライフスタイルの宣揚によって、子ども達は個室をもち、その部屋には様々なモノが溢れるようになった。1950 年代、町内の裕福な家庭にしか備わっていなかった一台のテレビを、近所の子ども達が人気番組の時間帯に訪れて一緒に観る光景が見られた。やがて、各家庭に一台の時代になったが、まだ番組を譲り合って観る家庭内のマナーは見られた。現在、テレビは個人に一台、というよりパーソナルコンピューターや携帯電話に付随するワンセグで、いつでもどこでも観ることができるようになった。こうした変化は電話をめぐる変化にも典型的にみられ、個人が身につけて持ち歩くことが普通になった携帯電話の使用については、もはやマナーという言葉は死語に近いのが現状である。

⑵　日本的経営とマナー

1960 年代から 1980 年代にかけて、産業構造の変化は職業別就業構造にも大きな変化をもたらした。1950 年代の就業者総数に占める第一次産業従事者の比率は 48.5％で約半数を占めていたのに対して、第二次産業は 21.8％、第三次産業は 29.8％だった。それが 1970 年には、第一次産業従事者が 19.3％、第二次産業は 34.0％、第三次産業は 46.6％と大きく変化し、第一次産業従事者の減少傾向が顕著にみられた[7]。1970 年以降は、第一次産業の減少がさらに進み、それまで上昇傾向にあった第二次産業従事者も減少に転じた。つまり、第三次産業の時代に入ったと言えるのである。このような第三次産業の発展は、パートタイム労働や既婚女性の就業が増加した要因のひとつであったといえる。女性労働者は、パートタイマーとして安い賃金で効率良く利用できることから、企業にとっては好都合であり重宝であった。そして第三次産業の中でも、販売やサービスよりも管理･営業･研究開発等の間接部門の比率が高まった。これは、より複雑で高度な知識を必要とする就業者が求められるようになったことを意味する。

日本の高度成長経済を支えたのが戦後の大企業に端を発する終身雇用制と年功序列型賃金だった。これらは総じて「日本的経営」と呼ばれ、日本独自の経営管理体制を創出したと評価された。しかし、この方式は雇用方法に偏りを生じさせ、高校や大学の新卒者を卒業と同時に大量に採用するというバランスを欠く状況を生みだした。

まだ就業上の実力を確認する前に採用された新卒者は、会社内の社員教育によって仕事上の知識や技能ばかりでなく、人格的な陶冶まで施されることで社風に染まるのが暗黙の了解であった。就職ではなく「就社」と言われる所以であり、中途採用者の入り込む余地のないシステムであった。必然的に公務員や大企業のような安定した職場に就職するためには有名大学のブランドや、大学受験と同様の試験技術が要求されることになり、大学受験こそが一生を左右する重大事になった。

こうした日本的経営が企業の競争力の強化に寄与し、日本の高度成長を推進する土台となったことは知られているとおりである。しかし、経済の成長という限定された目標に対して合理的・合目的的であったこのシステムは、学校を競争の場に変え、人々の関心を企業の内部だけに向けさせる傾向を強化した。結果、学校ではお互いを思いやる交流よりも「いじめ」にみられるようなネガティブな人間関係が横行し、企業社会では、公共の利益よりも会社の利益を優先させる風潮が蔓延した。

こうした歴史的時間的進化とともに形成されてきたマナーを、熊倉（1999）のマナー形成層を基に考察した。佐々木（2009）は図 2 のとおり、現代青年のマナーに関する見方を人間の成長過程において重層的に捉える仮説モデルを考えた。すなわち、現代社会における個人内のマナー形成には四つの層が関わっていると考えられる。

Ⅲ．個人におけるマナーの形成層 ── 発達論的視座

ヘッケル、ホール、エリクソンの各理論の考察から、個人のマナー形成の背景にあるものを検証する。個人には重層的にマナー層が形成されていくと考える。

個人のマナーがどのように形成されていくのかを考えた時、その行動や思考が内外からどのようなメカニズムで取り入れられるのかを検証しなければならない。誕生から接する、親をはじめとした周りの大人達とのかかわり、つまり個人を取り巻く環境は成長において大きな役割を果たしていることは明らかであることから、人間の発達理論から考察する。

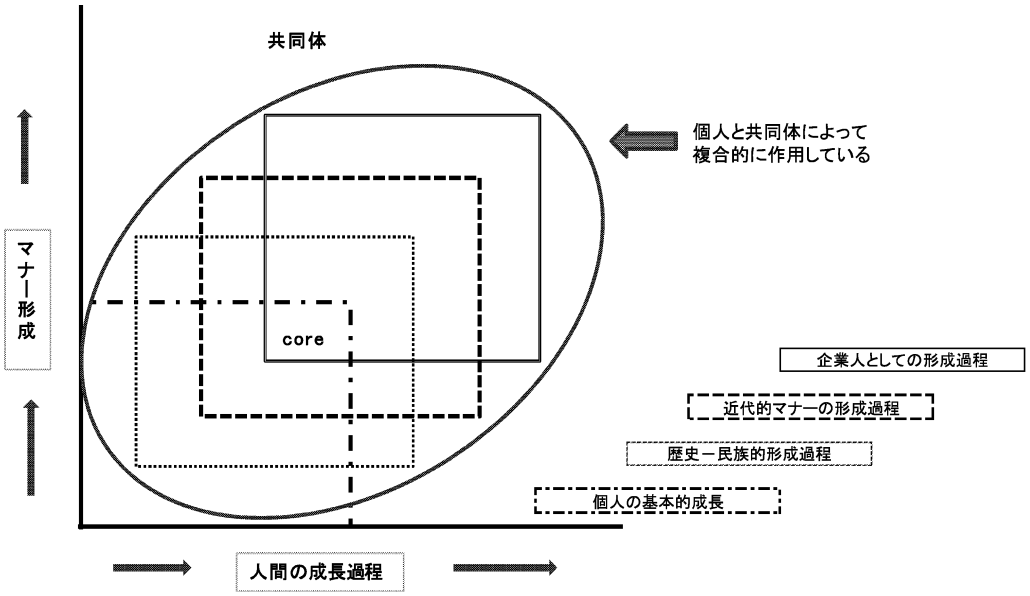
１．ヘッケルの反復説

子どもが日常生活において得るさまざまな知識は、人間の歴史の始まりからなるものと予想されている[8]。生物

[7] 正村公宏（2010）『日本の近代と現代　歴史をどう読むか』

[8] 矢野喜夫･落合正行(共著)（1991）『発達心理学への招待　人間発達の全体像をさぐる』P 19

図 2　個人のマナーの形成層



学者ヘッケル（E, Haeckel.）は、個体の発達はその種の進化的な発達と同じ順序で進み繰り返され、そして祖先の段階の証拠は、胎生期の発達に明確に見出されると述べている[9]。つまり、胎児が人として完成された姿で生まれるまでの、発達、進化の経緯であり、遺伝的要素が関連している。このようなヘッケル（E, Haeckel.）の反復説は、進化的な発達や変化は成体形への付加という形で現れるという形態的変化に対しての考え方であったが、心理学者は行動や心の理論の反復説を唱えた。それは、人間が誕生してからの発達に関連しているものといえ、個人の心の発達や文明という環境が影響してくるというものである。

2．ホールの理論

ホール（Hall, G. S.）は、ヘッケル（Haeckel, E.）の反復説を文化や社会的行動に適用した。人は進化を続けており、特に青年期がその進化的前進をとげるための出発点であるはずだと考えた。さらに、人の個体発生は祖先の行動をたどると主張した。つまり、現代における 8 歳から 12 歳の子どもの心や行動が祖先の行動や思考と一致するとし、子どもを知ることは祖先を知ることにつながる。こうした年齢に伴う変化の中で、人類の文化や生活行動が反復していくことは、個々の発達のなかで個人の成熟があるといえるだろう。

ホールのいう反復説が、文化や社会的行動という外的な要因において、人の発達に影響があるとすれば、まさに日本のマナー文化は発達という共有されたなかで繰り返され伝承されてきたといえる。

3．エリクソンの生涯発達論

エリクソン（Erikson, E. H.）は、フロイト（Freud, S.）の発達論の考えを引き継ぎ、生涯に渡る自我の確立を心理、社会的面から理論展開した。人間の生涯の発達において、最も重要なことのひとつにあげられるのが「人との出会い」である[10]。エリクソンは、こうした出会いと出会いによってもたらされる心理的・社会的な危機、そして危機を乗り越えて達成される発達課題をライフサイクルとして論じている。ライフサイクル論は、乳児期、幼児期前期、幼児期後期、児童期、青年期、前成人期、成人期、老年期と人生を 8 つの時期に分け、それぞれの時期において体験する危機や葛藤そして課題の達成が個人の成長になるとする。

特に青年期については、「自我同一性の確立」が発達課題であるとされ、それは「自分とは何か」「自分の人生の目的は何か」「自分の存在意識は何か」「自分の存在意義は何か」など自己を、社会にどう位置づけるかという問に対する肯定的回答であるとしている（山内他 2006）。青年は、こうした中で意思決定という危機を経験しながら、自分自身のアイデンティティーを形成していくものと考えられる。

Ⅲ－1．「個人の基本的成長過程」

熊倉（1999）の三層構造論における 1 層に相当する過程は、出生から乳幼児を通じて人的環境である親との安

[9] D. F. ビョークランド＆A. D. ベレグレーニ　無藤隆（監訳）（2008）『進化発達心理学ヒトの本性の起源』P 49

[10] 澤田瑞也（編）（1995）『人間関係の発達心理学 1　人間関係の生涯発達』P 107

定した関わりをもち、人として発達形成されていく。エリクソンは、乳幼児期の発達に重要な人物に母親的人物をあげている。母親から愛されているということや大切にされているという自信をもつことができれば、基本的信頼につながっていく（澤田 1995）。また尾形（2006）は、乳幼児の微笑みは家族間との愛着関係の基礎を築きあげるとしている。初めの頃は、生理的・自発的な微笑みであるが母親や家族が声をかけたり、微笑み返すことにより、相互作用が働き乳幼児も能動的に返すようになる。こうした繰り返しにより、乳幼児も母親に無条件に愛されていると感じるようになる。乳児自身の満足度も高まり、愛着が強化される。

また、愛着行動は乳幼児の運動機能や認知機能の発達にともない段階ごとに発達していく。出生から 12 週頃は、人を識別する能力がないが、近くにいる人に対して定位や発信を行う。人の声を聞いたり、顔を見て泣きやむことがよくある。生後 12 週頃から 6 ケ月頃は、母親の顔や声に微笑んだり声を出したりし、人物に応じて反応を示すようになる。生後 6 ケ月頃から 2 ～ 3 歳頃は、相手が誰かによる反応が明らかに異なってくる。反応レパートリーも増え、母親を後追いするようになる。3 歳前後は、母親の行動などを観察し、自分のしたいことへの目的達成のために、どうしたら良いかという計画をある程度推察し、母親の行動を予測するようになる（山内他 2006）。このような愛着の発達行動には個人差があるが、愛着が乳児にとって安定的であることは、他者の信頼にもつながり、のちにさまざまな社会的情緒が発達し形成される。

Ⅲ－２．「歴史 ── 民族的形成過程」

熊倉（1999）の三層構造論における 2 層に相当するのは、民族としての形成過程である。青年期は、社会的相互作用を通して自己を形成し自立を目指す。この時期における自己概念は、外面的な部分から内面的な部分へ変化し、また他者との関係に関しては近接関係から感情的関係へ変化するなど、その内容は思考能力の発達により変化していく。

西平（1993）は、アイデンティティの感覚とは人が成長し発達していくなかで、自分自身と一体であるという感覚を意味し、同時に共同体の歴史、あるいは神話体系とも、その未来とも一体であるという共同体の感覚に対する親和感も意味するとしている。自分自身が共同体と一体であると感じるためには、その共同体へ帰属しているという感覚を伴う事によって初めて成り立つものである。さらに個人の発達において、個人は歴史自体を動かし、また歴史によって動かされるという関連を保ちながら、次世代に承継していく。つまり、日常生活における儀式化（しつけの仕方、挨拶の仕方や食事のマナー、日常生活のあらゆる習慣）を通して、共同体に適応し、共同体も儀式化を通して個人の中に共通の世界観を移し入れ成員を共同体の中に組み入れていく。しかもその共同体自身は、子どもから親へと発達していく過程にある人間によって構成されている。こうした相対的プロセスこそが次世代に承継されていくものである[11]。また、自立への道を進む青年は、自分自身のこれまで歩んできた道を振り返り、自問自答を繰り返しながら進む。この時期の青年にとって友人や仲間、価値観が同じ集団との出会いが重要であり、個人の同一性の形成に深く関わることが多い。こうした他者との相互作用は、価値観や生き方を確かめあい、選択し、葛藤しながら自己を形成していくものといえ重要なことである。青年期は、独立や性的成熟、一人前の社交性の行動すべてが、親和的な状態を作ることへの移行の時期であり、児童期に自覚しなかったようなひとつの決断が必要であるとしている。それは、自分に与えられた自分自信の生き方への選択であり、同時に自分がもたなければならない責任を自覚するものでもある（西平 1990）。そして、日本の社会の価値を受け止め、与えられた使命感をもって自分を社会に位置付ける。

Ⅲ－３．「近代的マナーの形成過程」

明治期は、徳川期から受け継がれた礼節の絆によって、さまざまな文化的シンボルやイディオムを共有することで結びあっていた。それは、すでに文化的達成が暗黙のうちに完成していたからであった。日本人として日本人であること、日本という空間に美しき伝統と文化が存在し、文化的統一性を自分たちのものとしていた（池上 2005）。人々が、俳諧・浄瑠璃・囲碁・狂歌・和歌・書画・生け花など、さまざまな趣味的な集まりに参加したのは、純粋に個人の意思であり個人の教養を高めることや自分自身の地位向上のためであった。このような個人の選択を基盤として、複数の所属アイデンティティーが可能になることこそ、近代性を図る重要な指標である[12]。

身分序列になじんでいた江戸時代は、行き交う人々がその服装や髪型、物腰により格差の判断をしたり、頭を下げあう人々を見てその傾斜角度から身分を知った。それは、相手の地位にふさわしい応対ができることや社交上の失敗をせず合理的に接することができるというものであった。しかし、こうして当たり前のように行ってきた振る舞いが、身分制度がなくなることにより、今後はどのようにすべきか、というところで当時の人々は思案に暮れたのではないだろうか。四民平等の新しい社会では、武士階層の習慣やマナーを基準とする選択を行ったわけであるが、西洋のマナーの流入もあり、それまで伝

[11] 西平直（1993）『エリクソンの人間学』P 112
[12] 池上英子（2005）『美と礼節の絆』P 461

統的な礼法をたしなんできた人々にとっては、不安や葛藤があったといえる。つまり、四民平等という自由な身分と引きかえに人々は、自分の生き方を自己の責任において生きるという決断をした。それは、同時に外集団でのエチケット、マナーの習得をしなければならないことであった。仲間というコミュニケーションの場において人々は他者を思いやるマナーを形成させてきたが、身内、仲間、他人からさらにその外に向けた価値観を異にする集団（井上 2007)、世間という概念を意識するようになる。それは結果的に、見知らぬ人にどう接するのか、どう対処するのかという「自己」の現れであった。

Ⅲ－４．「企業人としての形成過程」

個人が、「個人の基本的成長過程」、「民族的形成過程」、「近代的マナーの形成過程」を通して人間としての成長を遂げていくが、四つ目に形成されるものとして、「企業人としての形成過程」をあげる。

かつて日本には、伝統的家族観に「家」制度があった。家族の人々を「家」に従属する存在とみなし、一体的結合と継続発展を重視した。それは、「個人」の目標は「イエ」の目標に従属し、「イエ」の目標は地域社会や職業集団などの中間的規模の集団の目標に従属し、さらに「中間的集団」の目標は「国家」の目標に従属するという、強力なヒエラルキーが成立した。こうした構造は人々の概念の中に定着した(井上 2007)。これは日本人が場を重視する要因のひとつである。日本人の中にある集団に対する意識は、普遍的な「家」の概念にもとづいた生活共同体としての「家」が構成されているからである（谷内 2007)。また、集団との調和を尊重する価値観も生まれていた。しかし戦後、「家」制度は廃止され、人々は企業にその場を求めた。終身雇用制度から生まれた帰属意識の高さは、企業という集団をウチと呼ぶアイデンティティーが存在した。マズローは、人間には集団に所属したいとする社会的欲求が存在し、集団に対する所属意識をもっている。その組織に所属することで、企業意識が高まり自分の社会的評価やステータスを高めることにつながる（谷内 2007)。

個人が人生のなかで、最も長い時間関わりをもつのが仕事である。多くの人は、自ら自分自身が身を置く組織を選択しキャリアを形成していく。そこには、職業における環境や組織における環境が存在するが、ともに相互に作用しキャリア形成の要因となっていく。スーパー(D, E. Super）は職業的発達の過程を職業的成熟と職業的自己概念を中心概念に捉えた（宗方・渡辺 2002)。つまり、職業的発達の過程はその職業における役割だけではなく、個人の人生において経験するさまざまな役割によって構成されるものである。また、個人の自己形成は自己の行動により自己を知る場合と、他者との関わりの中で自己を知るという二つの場合がある。個人が他者や集団とどの程度関わるかによって、その者、その集団に対する所属意識は変わる。さらにこの時期は、次の世代に継承していくものの形成と次の世代に育てられることによって、社会的な存在としての自己形成に関わっている。つまり、自分自身に向き合い新しい自分の同一性の再構築をはかる時期である。こうした葛藤を乗り越えることによって、組織全体、社会全体を視ることができ、自ら判断する立場にいることを理解し、次世代を信じ任せることができる権威性が身につく(澤田 1995)。また、集団内での自己の確立は、規律や社会のシステムを学ぶことにつながる。

Ⅳ．現代の大学生がもつマナーの意識調査

前章までは、歴史的に形成されてきたマナー層を基盤に、個人のマナー形成をその成長過程から考察した。「個人の基本的成長過程」、「歴史 ── 民族的形成過程」、「近代的マナーの形成過程」を経て、「企業人としての形成過程」への、移行時期を迎えている大学生の現状を検証する。

大学生のマナーに対する意識状況を把握するため、アンケート調査をおこなった。すでに社会人となっている青年ではなく、大学生に焦点をあてて調査をしたのは、これから社会に出ていく準備期間としての 4 年間をどのような意識を持って過ごしているのか、という現状を捉えるためである。

Ⅳ－１．調査の目的

マナーは個人の成長とともに形成されることから、環境要因が大きな比重を占めるものと思われる。また、多世代に渡ってのマナーの乏しさが言われているが、なかでも特に若い世代に多いという指摘がある現況から、状況を把握するために調査をおこなった。本調査ではこうした懸念も含め、これから社会人となる青年達が①マナーをどのように捉えているのか、②社会に出て行く時期を迎え、マナーの必要性についてどのように考えているのか、③青年達の環境はマナーを身につけることのできる環境であったかどうか、④社会に巣立つ準備機関である大学に対して、どのような希望をもっているのか等、これらを実証的に検証することを目的とする。

Ⅳ－２．調査方法

［調査対象］札幌市内私立大学生 392 名
　　1 年 147 名、 2 年 88 年、 3 年 115 名、
　　4 年 41 名、男性 308 名、女性 84 名
［調査期間］2008 年 6 月～ 7 月
［調査方法］配布式無記名アンケート方式

［回　　収］392 名、100％

［大学生に行ったアンケート内容］Ｑ１：あなたは一般的に考えて自分には基本的なマナーが備わっていると思いますか。Ｑ２：生きていくうえでマナーは必要だと思いますか。Ｑ３：マナーの知識のないことで失敗したことはありますか。Ｑ４：マナーがない人から迷惑を被ったことがありますか。Ｑ５：親や教師、周りの大人からマナーに関し具体的に教えられたことがありますか。Ｑ６：就職において基本的なマナーを心得ていることは必要だと思いますか。Ｑ７：企業は基本的なマナーのある人間を求めていると思いますか。Ｑ８：挨拶の仕方、敬語の使い方、電話の応対、名刺交換の仕方などのビジネスマナーを正しく習得して就職したいと思いますか。Ｑ９：社員のマナーの善し悪しが会社のイメージに影響すると思いますか。Q10：マナー（基本的なマナー、ビジネスマナー含む）に関し、大学で教えてほしいことはありますか。

Ⅳ－３．分析方法

各質問事項のデータ分析は Fisher の直接確率検定を採用し、有意水準を５％未満に設定した。なお、分析において『SPSS Fisher's exact test (Extended)』を使用し、２×２クロス集計表以外のものについては、青木繁伸氏のプログラムによって計算した。（http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/exact.html）

Ⅳ－４．結果と考察

⑴「個人の基本的成長過程」、「民族的形成過程」、「近代的マナーの形成過程」にまつわるマナーに関して、質問２と質問３については、表１のとおり χ^2=7.56、df＝２、フィッシャーの直接確率法によって得られた正確有意確率は P＜.05 となり質問２と質問３は関連があるといえる。質問５と質問２の関連は、表２のとおり χ^2=14.68、df＝２、P＜.05 で、質問５と性別の関連においても表３からわかるとおり、χ^2=5.86、df＝１、P＜.05 となり双方に有意差が認められた。また、パーセンテージの結果は、親や教師、周りの大人からマナーに関し、教えてもらったことがあると答えた学生は、女子 70.2％、男子 55.2％と女子の方が教えられた経験のある学生が多いことがわかった。学年別においては、４年生の 63.4％が「教えてもらったことがある」と回答している。（表８）

⑵「企業人としての形成過程」にまつわるマナーに関しては、質問６と質問２との関連について表４のとおり χ^2=29.38、df＝４、P＜.05 となり有意差が認められた。また、表８から質問６のパーセンテージにおいて性別では、男子 91.9％、女子 95.2％が「就職において基本的なマナーを心得ていることは絶対必要だ」と回答している。

表１　質問３と質問２のクロス集計表　（単位：人）

	Ｑ２：生きていくうえでマナーは必要だと思うか			
Ｑ３：マナーの知識のないことで失敗したことがあるか	１．絶対必要	２．最低限でよい	３．必要ない	合　計
１：ある	97	39	0	136
２：ない	145	104	2	251
合　　計	242	143	2	387

χ^2=7.56、df＝２、P＜.05

表２　質問５と質問２のクロス集計表　（単位：人）

	Ｑ２：生きていくうえでマナーは必要だと思うか			
Ｑ５：親や教師、周りの大人からマナーに関し教えられたことがあるか	１：絶対必要	２：最低限でよい	３：必要ない	合　計
１：ある	161	66	1	228
２：ない	83	77	1	161
合　　計	244	143	2	389

χ^2=14.68、df＝２、P＜.05

表３　質問５と性別のクロス集計表　（単位：人）

	性　　別		
Ｑ５：親や教師、周りの大人からマナーに関し教えられたことがあるか	１：男　性	２：女　性	合　計
１：ある	170	59	229
２：ない	136	25	161
合　　計	306	84	390

χ^2=5.86、df＝１、P＜.05

表 4　質問 6 と質問 2 のクロス集計表　（単位：人）

	Q 2：生きていくうえでマナーは必要だと思うか			
Q 6：就職において基本的なマナーを心得ていることは必要か	1．絶対必要	2．最低限でよい	3：必要ない	合　計
1：絶対必要	232	130	0	362
2：面接試験だけ必要	7	7	1	15
3：入社してから身につければよい	5	8	1	14
合　　計	244	145	2	391

χ^2=29.38、df＝4、P＜.05

表 5　質問 8 と学年のクロス集計表　（単位：人）

	学　　年				
Q 8：ビジネスマナーを正しく習得して就職したいか	1 年	2 年	3 年	4 年	合　計
1：正しく習得したい	131	80	98	30	339
2：就職先で教えてくれるから今はわからなくてよい	9	3	4	8	24
3：自然に覚えるから今はわからなくてよい	7	5	12	3	27
合　　計	147	88	114	41	390

χ^2=18.74、df＝6、P＜.05

表 6　質問 10 と質問 6 のクロス集計表　（単位：人）

	Q 6：就職において基本的なマナーを心得ていることは必要か			
Q10：マナーに関し、大学で教えてほしいことはありますか	1．絶対必要	2．面接試験だけ	3．入社してから	合　計
1：ある	175	2	7	184
2：ない	187	13	7	207
合　　計	362	15	14	391

χ^2=7.14、df＝2、P＜.05

表 7　質問 7 と質問 6 のクロス集計表　（単位：人）

	Q 6：就職において基本的なマナーを心得ていることは必要か			
Q 7：企業は基本的なマナーのある人間を求めていると思うか	1．絶対必要	2．面接試験だけ	3．入社してから	合　計
1：求めている	343	11	10	364
2：さほど重視していないと思う	20	4	4	28
合　　計	363	15	14	392

χ^2=19.77、df＝2、P＜.05

学年別では、1 年 91.8%、2 年 94.3%、3 年 93.9%、4 年 87.8%という結果である。質問 8 については、表 5 のとおり学年との関連において、χ^2=18.74、df＝6、P＜.05 となり有意差が認められた。表 8 のパーセンテージにおいても、「ビジネスマナーを正しく習得して就職したい」と回答したのは、1 年 89.1%、2 年 90.9%、3 年 85.2%、4 年 73.2%という結果である。また、質問 6 と質問 10 との関連においても、表 6 のとおり、χ^2=7.14、df＝2、P＜.05 となり有意差が認められた。パーセンテージにおいては、「マナーに関し、大学で教えてほしいことがある」と回答したのは、1 年 44.2%、2 年 48.9%、3 年 44.4%、4 年 61.0%という結果であった。性別では、男子が 44.5%、女子が 56.0%である。（表 8）

質問 7 と質問 6 の関連について、表 7 から χ^2=19.77、df＝2、P＜.05 となり、有意差が認められた。

このような調査･分析結果から次のように考察できる。初めに結果(1)に関して、表 1 の検定結果から分析すると、「マナーの知識のないことで失敗した事がある」と回答した学生は、「失敗したことがない」と回答した学生よりも、「生きていくうえでマナーは絶対必要である」と考えている割合が高いということがわかった。マナーの知識のないことで失敗した経験者は、その経験からマナーの必要性を身をもって感じとっていることが示唆された。また、表 2 の結果から「生きていくうえでマナーは絶対必要だ」と思っている学生は、家庭において身につくとされる一般的なマナーは、「親や教師、周りの大人から教えられたことがある」と回答している割合が、「教えられたことがない」と回答している学生の割合に比べ高いことがわか

表８　大学生のマナー観についての基礎調査結果　（%）

質問事項		属性	性別 男子 (n=308)	性別 女子 (n=84)	学年 1年 (n=147)	学年 2年 (n=88)	学年 3年 (n=115)	学年 4年 (n=41)	学年 無回答 (n=1)	全体
質問１	自分には基本的なマナーが備わっていると思いますか	１．基本的なマナーはある	48.4	44.1	48.3	40.9	52.2	43.9	100.0	47.5
		２．少しある	48.1	51.2	47.6	54.6	45.2	51.2		48.7
		３．あまりない	3.6	4.8	4.6	4.6	2.6	4.9		3.8
質問２	生きていく上でマナーは必要だと思いますか	１．絶対必要	61.7	64.3	59.2	61.4	65.2	68.3		62.2
		２．最低限のマナーを知っていれば良い	37.3	35.7	40.8	38.6	33.9	26.8	100.0	37.0
		３．必要ない	0.7				0.9	2.4		0.5
		４．無回答	0.3					2.4		0.3
質問３	マナーの知識がないことで失敗したことはありますか	１．ある	34.1	38.1	32.0	40.9	34.8	34.2		35.0
		２．ない	65.3	59.5	66.7	59.1	64.4	63.4		64.0
		３．無回答	0.7	2.4	1.4		0.9	2.4		1.0
質問４	マナーのない人から迷惑を被ったことはありますか	１．ある	57.8	61.9	54.4	56.8	61.7	68.3		58.7
		２．ない	41.6	36.9	45.6	42.1	37.4	29.3	100.0	40.6
		３．無回答	0.7	1.2		1.1	0.9	2.4		0.8
質問５	親や教師、周りの大人からマナーに関し、教えられたことはありますか	１．ある	55.2	70.2	58.5	52.3	61.7	63.4	100.0	58.4
		２．ない	44.2	29.8	40.1	47.7	38.3	36.6		41.1
		３．無回答	0.7		1.4					0.5
質問６	就職において、基本的なマナーを心得ていることは必要だと思いますか	１．絶対必要	91.9	95.2	91.8	94.3	93.9	87.8	100.0	92.6
		２．面接試験だけ必要	3.9	3.6	4.8	2.3	2.6	7.3		3.8
		３．入社してから身につければ良い	4.2	1.2	3.4	3.4	3.5	4.9		3.6
質問７	企業は基本的なマナーのある人間を求めていると思いますか	１．求めている	91.9	96.4	94.6	93.2	91.3	90.2	100.0	92.9
		２．さほど重視していないと思う	8.1	3.6	5.4	6.8	8.7	9.8		7.1
質問８	ビジネスマナーを正しく習得して就職したいと思いますか	１．正しく習得したい	84.7	92.9	89.1	90.9	85.2	73.2		86.5
		２．就職先で教えてくれるから今は分からなくてよい	7.5	2.4	6.1	3.4	3.5	19.5	100.0	6.4
		３．自然に覚えるから今は分からなくてよい	7.5	4.8	4.8	5.7	10.4	7.3		6.9
		４．無回答	0.3				0.9			0.3
質問９	社員のマナーの善し悪しが会社のイメージに影響すると思いますか	１．そのまま影響する	77.0	86.9	82.3	78.4	76.5	75.6	100.0	79.1
		２．関係ない	3.9	4.8	4.1	8.0	1.7	2.4		4.1
		３．悪い場合のみ影響する	17.9	8.3	12.2	13.6	20.2	22.0		15.8
		４．良い場合のみ影響する	0.7		0.7		0.9			0.5
		５．無回答	0.7		0.7		0.9			0.5
質問10	マナーに関し、大学で教えてほしいことはありますか	１．ある	44.5	56.0	44.2	48.9	44.4	61.0		46.9
		２．ない	55.2	44.1	55.8	50.0	55.7	39.0	100.0	52.8
		３．無回答	0.3			1.1				0.3

表９　相関係数行列

	質問１	質問２	質問３	質問４	質問５	質問６	質問７	質問８	質問９	質問10
質問１	1									
質問２	0.1327**	1								
質問３	0.0035	−0.1335**	1							
質問４	−0.1278*	−0.0211	0.3726**	1						
質問５	−0.0708	−0.1939**	0.2573**	0.2591**	1					
質問６	−0.0047	0.1230	−0.0667	−0.0629	−0.1398**	1				
質問７	0.0057	0.1122	−0.0112	0.0413	−0.0494	0.2244**	1			
質問８	0.0714	0.1621**	−0.1261*	−0.0591	−0.1304**	0.3207**	0.2420**	1		
質問９	0.0528	0.0812	−0.1186*	−0.1503**	−0.1176*	0.1711**	0.1296*	0.2307**	1	
質問10	−0.0314	0.1376*	−0.2680**	−0.2434**	−0.1542**	0.0910＋	0.0632	0.0968＋	0.1330**	1

注１）*印、**印、＋印は相関に有意が出た項目である
注２）*P＜.05、**P＜.01、＋P＜.10

る。これは、学生をとりまく環境によってマナーの必要性に違いが出たものと思われる。表 3 の性別においては男子、女子どちらも「親や教師、周りの大人から教えられた事がある」と回答している学生の方の割合が高い。性別においては、男子 306 名に対し、女子 84 名と男女の人数に大きな差があるため、表 8 のパーセンテージ結果から考察する。パーセンテージでは女子 70.2%、男子 55.2%という数字が出ており、女子の方が教えてもらった経験のある割合が高いことがわかる。パーセンテージの結果から、日本の家庭において女の子らしい躾を行うという風習が少しでも残されていることが窺える。現代においても家庭におけるマナーは、その層は薄くなりつつも伝承されていることが示唆されたといえるだろう。

結果(2)の表 4 ～表 7 に関する検定結果から表 4 について、「就職において基本的なマナーを心得ていることは絶対必要」だと回答した学生は、「生きていくうえでマナーは絶対必要だ」と考えている割合が高い。これは、一人の人間としてマナーが必要だと思っているということと、企業人としての自分にとっても、マナーの必要性を認識している結果だといえる。また、表 7 に関し企業も、「一般的なマナーのある人間を求めている」と思っている学生は、「就職において基本的なマナーを心得ていることは絶対必要だ」と回答している割合が高い。これは、マナーの備わった人間として社会に出ることの自覚を高くもっていることが示唆された。同時に、「企業が求めている人間も基本的なマナーのある人間だ」という認識の高さが窺える。表 5 の検定結果は、すべての学年において、ビジネスマナーを正しく習得して就職したいと考えていることがわかった。また表 6 の結果から、「就職において基本的なマナーを心得ていることは絶対必要だ」と考えている学生が、「マナーに関し、大学で教えてほしい」と回答した割合は高かったが、「絶対必要」であっても「大学で教えてほしいことはない」と回答している割合もほぼ同じであった。表 8 のパーセンテージの結果からも、１年生から 3 年生のどの学年も、「大学で教えてほしいことはない」と回答している割合の方が高い。しかし 4 年生においては、61%の学生が「大学で教えてほしいことがある」と回答している。就職活動中あるいは、終えた学生は就職活動を通して多くの企業に接する機会があったことから、一般的なマナー、ビジネスマナーともに現実的なものとしてその大切さを捉えた結果だと言えるだろう。

以上のことから、学生は生きていくうえでの一般的なマナーの必要性を、「絶対必要だとはいえない」というものであっても、ビジネスマナーに関しては、「就職において絶対必要だ」という認識をもっていることが示唆された。また、家庭における躾の状況は希薄になりつつも、伝えられてきている現状が明らかになった。そして、学生自身が身を置く集団生活においてのマナー形成は、こうした社会状況のなかで葛藤しながら個人のマナー形成である「個人の基本的成長過程」と「民族的形成過程」、「近代的マナーの形成過程」を経ながら「企業人としての形成過程」へと進んでいるといえるだろう。

なお、「表 9　相関係数行列」は、各質問の組み合わせごとによる相関関係を表にしたものであるが、本稿においては参考資料として掲載する。

Ⅴ．今後の課題

マナーをめぐる様々な問題を、エチケットとマナー、礼儀と作法という構造的な関連性の観点から論じてきた。マナーや作法のような実際の行為は相手や時代によって変化していくものであるが、エチケットや礼儀はさまざまな場面で立場を越えて尊重し合う行動の規範であり、また、人と人とがコミュニケーションを媒介にして関係をもつ上で必須の思いやりの心や態度であるから、長期にわたって変化しにくいものであることもわかった。しかし、今回の考察だけでは納得のいかない部分が残ったのも事実である。世代が変われば当然のごとく文化も変わり、人々の行動様式も変化することから、何が正しいマナーかということも時代とともに変化し、それが「最近の若い人はマナーが悪い」と言われる淵源のひとつであると考えられる。しかし、現代社会におけるマナーに関する問題は、そうした「(いつの時代にもあった) 最近、若者のマナーが悪くなった」ということとは質を異にしているように思われる。

本論文の調査研究においても、日常的なマナーに関する意識の低さと、就職に際して求められるビジネスマナーに対する意識の高さは好対照をなすことがわかった。日常的なマナーが変わってきただけでなく、マナーに関する価値意識そのものも大きく変容してきたように思われるのである。その背景には、単に時代が変わったというだけでは説明が難しい現象が起きている可能性が示唆された。こうした変化はマナーそのものの変化のレベルだけでは説明がつかないのかもしれない。本来は、変わりにくいはずのエチケットや礼儀といった価値意識のレベルにおける変化にもメスを入れる必要を感じる。エチケットや礼儀も短期的には変化しにくい価値規範であるが、長期的にみれば歴史的な転換が見られたのも事実である。今後は、マナーや作法の問題を行為レベルに限定せず、それらを越えたエチケットや礼儀といった価値意識との構造的な連関を明らかにする研究が必要である。

引用・参考文献

Bjorklund, D. F & Pellegrini, A. D (2002) THE ORIGINS of HUMAN NATURE Evolutionary Developmental Psychology.（無藤隆（監訳）（2008）『進化発達心理学ヒトの本性の起源』新曜社）

Dewey, J.＝Meed, G. H. (NO date.) Human Nature and Conduct An Introduction to Social Philosophy.（河村望（訳）（1995）『人間性と行為』人間の科学社）

Erikson, E. H. (NO date.) Identity: Youth and Crisis.（岩瀬庸理（訳）（1973）『アイデンティティ　青年と危機』金沢文庫）

Everitt, B. S. (NO date) The cambridge dictionary of statistics.（清水良一（訳）（2002）『統計学辞典』朝倉書店）

Goffman, E. (1967) INTERACTION RITUAL. Essay on Face-to-Face Behaviour.（広瀬英彦／安江孝司（訳）（1986）『儀礼としての相互行為』法政大学出版局）

Lorenz, K.（1963）（日高敏隆・久保和彦（訳）（1970）『攻撃―悪の自然誌』みすず書房）

Peggy Post（2004）『Emily Post ETIQUETTE 17th Edition』Harper Collins Publishers.

池上英子（2005）『美と礼節の絆』NTT 出版

井上忠司（2007）『「世間体」の構造』講談社

梅棹忠夫（編著）（2005）『日本文明 77 の鍵』文芸春秋

尾形和男（編著）（2006）『家族の関わりから考える　生涯発達心理学』北大路書房

小川哲哉・小川精一・佐喜本愛・勝山吉章（2008）『日本教育史概論』青簡舎

河合隼雄（1997）『母性社会日本の病理』講談社

熊倉功夫（1999）『文化としてのマナー』岩波書店

小嶋秀夫（2001）『心の育ちと文化』有斐閣

坂脇昭吉・阿部誠（編著）（2007）『現代日本の社会政策』ミネルヴァ書房

佐藤慶幸（1981）『行為の社会学　ウェーバー理論の現代的展開』新泉社

澤田瑞也（編）（1995）『人間関係の発達心理学 1　人間関係の生涯発達』培風館

柴崎直人（2008）『〈小笠原流〉日本の礼儀作法・しきたり』PHP 研究所

心理科学研究会（編）（1988）『かたりあう青年心理学』青木書店

陶智子（2010）『日本人の作法』平凡社

谷内篤博（2007）『働く意味とキャリア形成』勁草書房

中島義明他（2010）『心理学辞典』有斐閣

中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係　単一社会の理論』講談社現代新書

二木謙一（2003）『武家儀礼格式の研究』吉川弘文館

西平直（1993）『エリクソンの人間学』東京大学出版会

西平直喜（1990）『成人になること　生育史心理学から』東京大学出版会

南風原朝和（2002）『心理統計学の基礎』有斐閣アルマ

早川操（1994）『デューイの探求教育哲学』名古屋大学出版会

広田照幸（編著）（2006）『第 3 巻　子育て・しつけ』日本図書センター

正村公宏（2010）『日本の近代と現代　歴史をどう読むか』NTT 出版

宗方比佐子・渡辺直登（編著）（2002）『キャリア発達の心理学』川島書店

目黒依子・渡辺秀樹（編）（1999）『講座　社会学 2 家族』東京大学出版会

森真一（2005）『日本はなぜ諍いの多い国になったのか「マナー神経症」の時代』中央公論新社

矢野喜夫・落合正行（共著）（1991）『発達心理学への招待　人間発達の全体像をさぐる』サイエンス社

山内弘継・橋本宰（監）（2006）『心理学概論』ナカニシヤ出版

山川菊栄（1983）『武家の女性』岩波書店

渡辺三枝子（編著）（2003）『キャリアの心理学』ナカニシヤ出版

参考 URL
http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/exact.html